

鈴木大拙の妙好人解釈

蓮沼 直應

鈴木大拙は禅の研究者であると同時に浄土教に関しても独自の解釈を展開した人物である。特に在野の篤信者ともいえるべき「妙好人」に関しては、『宗教経験の事実』をはじめとする諸々の著作で主題化するなど、高い関心を有していた。「妙好人」の存在が一般に知られるようになった契機として、仰誓らの手によって近世の篤信者を伝記的に紹介した『妙好人伝』の刊行があるが、大拙自身は主に讃岐の庄松や浅原才市といった幕末、明治を生きた妙好人に焦点を当てていた。特に浅原才市に関する研究は晩年まで続けられ、その結果、彼は真宗の外部にも広く知られるようになったと言われている。

彼はある点では一宗の開祖である法然や親鸞よりも、在野の妙好人を評価していた。妙好人の思想的研究の草分けと位置づけられる大拙であるが、彼は妙好人をいかなる存在としてみなしていたのだろうか。本発表では鈴木大拙が妙好人、特に浅原才市をどのように解釈しているか、そしてその解釈がどのような思想的背景によって為されているのかを検討し、大拙の著述活動における妙好人研究の意味を明らかにしたいと思う。

まず妙好人の特質として、大拙は彼らの表現の直接性を指摘している。彼ら自身は特別な学問的な訓練を修めた訳ではなく、仏教の知識も善知識から直接伝達されたものであった。大拙は宗教意識の表現に際して、論理の枠組みや学問的な知識を障礙とみなしていた。禅の背景をもつ彼にとって、みずから感じたことの直接の吐露、もしくは直叙といった形式が、宗教意

識の表現として高い意義をもつものと考えていた。そのため、教法的な整合性にふりまわされることなく、自由にみずからの信仰を表現することができた妙好人に対して、彼は高い評価を与えたのである。

そのような妙好人の中でも大拙は浅原才市に言及することが多かった。大拙が彼を高く評価する点としては少なくとも二つの考え方に注目することができる。日常性の強調と機法一体の思想である。

浅原才市は下駄作りの職人として鉋を削る現場で「南無阿弥陀仏」の名号、阿弥陀仏への信心に徹していたという。大拙は浄土教の信者が一般的傾向として「ありがたい」「もったいない」という感情に満足して、一般社会における活動を軽視することを危惧していた。日常のすべての行為の中に悟りを実践していくことを理想とする大拙にとっては、世俗的労働の場で信心を感得していた浅原才市は他の念仏者に比して高い思想的親和性を有する存在だったのである。また、浅原才市は凡夫と阿弥陀仏との一体性を意味する「機法一体」という語をたびたび自身の詩の中で用いていた。大拙はこの機法一体の内実を「二にして一、一にして二」もしくは「即で非、非で即」と解釈していた。すなわち彼は、自身が以前から提唱していた禅経験の論理である「即非の論理」を体現する人物として、浅原才市を理解していたのである。

大拙は、禅は禅、真宗は真宗としてそれぞれの宗教伝統を尊重し、安易に両者のシンクレティズムを提唱した訳ではなかった。そうではありながらも、彼は真宗の伝統の中に自らの禅理

解を如実に体现する存在を見出した。彼らは真宗の信心を徹底させたためにかえって禅との接点を多分に有することになったのである。普遍的宗教意識たる「日本の靈性」を提唱し、禅の立場に留まらず浄土教をも論じる必要があった大拙にとって、妙好人、特に浅原才市とは禅と浄土教の橋渡しを可能にする存在だったのである。彼が晩年に至るまで妙好人を追い続けた背景には、このような禅との思想的親和性が見出せるのではないだろうか。

東西靈性交流における「靈性」の問題

峯岸 正典

「身体性を通じてしかわからない宗教上のレベルが存立する」という宗教学の根本問題に関わる問題意識もあり、東西靈性交流の討究を試みたい。外的特徴は、①禅とベネディクト会系の修道院で、相互の修行・修道生活を体験する。②社会的にアピールをしようとすることは意識されてない。③言語を通じての対話が二義的になっている、の三点である。最近、小布施祈恵子博士(オックスフォード大学)が提唱している並列主義 Parallelism、つまり、相互の信仰を尊重し、宗教としての優劣を原則として争わないで、対話、交流するという立場をふまれば、本交流は、この並列主義という枠のなかに入る。では、なぜ「靈性交流」なのか。当時、「日本の靈性を深く掘り下げ、また、ヨーロッパの靈性を深く掘り下げれば、共通の地下水脈に当たる」といった趣旨の言及もあった。これは鈴木大拙の『日本の靈性』等に基づく述懐と思われる。一方、大拙が

用いる「靈性」という言葉を道元が批判していることから、「大拙の説は基体説に当り、その主張に非仏教的なものがある」(石井修道『道元禅の成立史的研究』大蔵出版、一九九一年)という提議もある。仏教徒にとってもわかり安い説明は、フィリップ・シエルドレイクの「神の御霊に逆らうすべてのもの」という意味で『肉』の反意語だ(『キリスト教靈性の歴史』教文館、二〇一〇年)という叙述である。補足するならば、「肉」への傾きから materiality や sensuality が生じけると発表者は考える。また以前は「靈性」という名詞はほとんどの場合に聖職者に関連していた。(同一八頁)ので、「聖職者」同士の交流が最初から意識されていたと推測される。これらの「靈性」に関する言及をふまえ、武藤亮飛氏(筑波大学大学院)の紹介事例を考えてみたい。第一一回東西靈性交流(二〇〇九年)で、武藤氏は、禅の雲水たちが修道院において修道士に「なりきる」ことに徹していたことを報告している。(『現代における宗教の組織存続のための試み―宗教間対話再考―』(筑波大学大学院、修士論文、二〇〇九年一月)その一方で修道士たちから、雲水が「禅僧として」振る舞うことを要請されたという。この事例から、禅僧が、修道生活の型を徹底的に模倣することに於いて修道生活の何たるかを学ぼうとしているのに対し、修道士も、禅僧としての型、立ち居振る舞いから、禅が持っているものを学ぼうとしていた節が伺える。そもそも中世の女子修道院には食事中の沈黙を守るため、身体を通じて意志を通じさせる数多くのサインが存在していた。こうした伝統は、修道生活全般のなかで、話すこと、もしくは書くことを超